

巻頭言

「グローバルに見る」

当 Best Value は年間に 3 回程の発行を予定していますが、本号の発行は当初予定の昨年秋より半年以上遅れてしまいました、お詫び申し上げます。その間に世間の景況感は様変わりとなりました。わが国経済の長期停滞については、その原因と対策について様々な議論が重ねられてきましたが、今度こそ抜本的に取り組まんとするアベノミクスの第一の矢（金融緩和・デフレ脱却）が的を目標けて飛んでいるようです。第二の矢（積極財政・公共投資）も放たれ、第三の矢（成長戦略・規制緩和）が準備されているところです。

価値総研も言わば第二の矢を放ったところです。第一の矢は 2009 年秋に締結した、日本政策投資銀行（DBJ）及び日本経済研究所（JERI）との業務提携です。3 年余にわたる連携実績（共同調査・取引先コンサルティング・人材交流）を踏まえ、この 4 月に DBJ 出資を得て 100% のグループ会社となりました。この好機に DBJ の穴山産業調査部長からシンクタンク・価値総研に期待される役割について寄稿をいただきました。（Theme 1 「バリューチェーン革命の萌芽とシンクタンク」）

広く議論されていますように、アベノミクスの 3 本の矢もそれら自体はツールであり、きっかけ作りであり、最終的な目的はわが国の競争力、成長力、活力を回復させ、サステナブルな経済社会とすることです。価値総研について言えば、これまで築いてきた知見・ノウハウ・経験を DBJ ネットワークで活用し、DBJ グループの投資・融資・アドバイザリーの三位一体機能を強化し、わが国経済社会の発展に貢献することになります。

この巻頭言も調査・コンサルティングの役割・貢献について、27 号では「クライアントにブリッジを架ける」ということ、28 号では「半歩先を見る」ということを考えてみました。引き続き本号では、「グローバルに見る」ということを取り上げてみたいと思います。「半歩先を見る」際の重要な要素であると共に、国境のみならず領域・分野・時代を超えて「多面的に見る」ということに通じています。

我々一般人の多くがグローバル化を強く意識したのは、比較的最近のことではないでしょうか？リーマン・ショック（2008 年秋）後の長引く円高のため、製造業の海外進出の加速と国内の空洞化が取り沙汰された折、2010 年のわが国 GDP が中国に抜かれ世界第 3 位となったと報じられた折、あるいは 2011 年 3 月の東日本大震災の折などではないでしょうか。外国人が日本から一斉に居なくなったり、グローバル化したサプライチェーンの分断があったりしました。

直近では、グローバル人材に関心が集まっています。東大の秋入学構想が話題になりましたが、グローバル競争にさらされているのは企業ばかりではありません。グローバル人材育成は産官民をあげての課題となっています。グローバル人材とは、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性・チャレンジ精神、③異文化に対する理解力・幅広い教養、を兼ね備えた人材、とされています（グローバル人材育成推進会議）。確かにこうした人材が不足しているのはグローバル競争には勝てません。

ところで、グローバル化（globalization）とは、ヒト、モノ、カネ、情報の世界的な流れにより地球的規模における相互依存を成立・進化させるプロセスであり、交通輸送手段や情報通信手段（ICT）の技術革新・発達により加速されてきました。とりわけ 1990 年代から 2000 年代にかけて、東西冷戦の終結により市場経済圏が全世界に拡大したこと、インターネットを中心とする ICT の発展により市場が地球規模で結びついたことは大きなインパクトをもたらしました。

ところが、この期間はわが国の失われた10年あるいは20年にあたり、不良債権処理など内向きの課題に忙殺されていましたが、併せてわが国人口の高齢化が急速に進み負の調整が出現してきました。一方で世界経済の成長には目覚ましいものがあり、BRICsを初めとする新興国が台頭してきました。気がついて見ると、世界における日本の地位、国際競争力が大きく低下していた、というのが実感ではないでしょうか。

本号の研究員レポートの多くは「グローバル化」そのものを取り上げてはいませんが、グローバル化の加速への対応として重要な視点である、「グローバル＝グローバル＋ローカル」からの示唆と見ることができます。経済のグローバル化は経済成長の機会を提供する一方で、競争激化に伴う格差の拡大、摩擦の拡大をもたらすことにもなります。企業はグローバル化して生き延びることを模索しますが、国内雇用、地域経済、国民生活はどうなるのでしょうか。ますます加速して行くグローバル化の下、ローカルな個人にしても地域にしても各々の市場、即ち活動や競争の場が、望むと望まぬに拘わらず地球規模となり得ます。その際には、各々のアイデンティティ（個別性）や差別化がますます必要となりますが、その際にローカル（地域）性は最大の個性であり差別化要因ではないのでしょうか？

Theme 2「東京中心部のオフィス需給と東京再編への道」は、わが国活力の源泉である東京の国際競争力向上をオフィスの観点から展望し、Theme 3「最近の研究開発投資の動向」は、わが国イノベーション推進の鍵を握るオープン・イノベーションについて論じ、Theme 4「循環型地域社会構築におけるエネルギー自給」は、地域資源を活用したエネルギー自給を提唱し、Theme 5「応用一般均衡分析を用いたアジア国際交通分析」はアジア各国交通企業の競争力がグローバル経済に及ぼす影響を分析し、Theme 6「ニッチ戦略再考」は、競争のない市場を創造的に開拓するニッチ戦略について考察し、Theme 7「路地裏の経済学」は、ロシアが持っているグローカリズムをロシア正教という切り口から紹介しています。

わが国経済の長期停滞は自覚しつつも、東日本大震災や国際的地位の凋落といったショックで目覚めるまで、われわれは内向きでグローバルにすることができず事態を悪化させてきたと思えます。冒頭に見たアベノミクスにしても、産官学のグローバル人材育成にしても、グローバルにすることで新たにしたわが国の心意気ではないのでしょうか？

代表取締役社長 森 和之